

平成 25 年 3 月 21 日

若手アカデミー委員会 報告

若手アカデミー委員会委員長 駒井章治

若手アカデミー委員会は、若手科学者によるアカデミー活動を実践しつつ、我が国における若手アカデミーの創設に関する事項を審議するために、幹事会附置委員会として設置されている。30～45 歳代の若手科学者を中心に組織されている。

## 1. 会議開催

本年度は、6 回の会議と 1 回の拡大役員会、5 回のメール審議を行った。下記に本年度に行った主な活動について概要を報告する。

## 2. 報告事項

### (1) 学術の未来検討分科会

「日本の展望」等を踏まえた、若手科学者による未来において実現したいビジョンに基づく学術の未来像について検討を行うために、平成 24 年 3 月から設置されている。

- ・ 第 1, 2, 3 回分科会（平成 24 年 4 月 25 日、5 月 25 日、6 月 23 日）：「日本の展望 2010」の読み合わせと課題抽出、ヒアリング企画の設計を行った。
- ・ 第 4 回分科会（平成 24 年 8 月 9 日）：若手アカデミー委員会委員 16 名を参考人として招致し、学術界の展望についてのヒアリングを行った。
- ・ 第 5 回分科会（平成 24 年 11 月 19 日）：若手アカデミー委員会のシンポジウム「学術と未来展望一人は未来の社会を展望できるのか」の企画、開催を行った。
- ・ 第 6 回分科会（平成 25 年 1 月 14 日）：メディア関係者二名（津田大介氏、吉田貴文氏）を参考人招致し、「学術界・若手研究者への期待」についてのヒアリングを行った。
- ・ 第 7 回分科会（平成 25 年 3 月 14 日）：平成 24 年度を総括し、平成 25 年度のヒアリング企画、および報告書執筆について議論した。

(隠岐さや香委員（分科会委員長）)

### (2) 若手研究者ネットワーク

#### ○若手研究者ネットワークの構築

若手研究者ネットワークは、2012年11月の若手アカデミー委員会の承認を経て、12月に発足した。分野を越えた日本初の大規模若手研究者のネットワークを確立、学際融合の新たな研究の創出、行政の動きを鑑み、必要な時に若手の意見を集約して各方

面に強力にアピール、海外の若手研究者組織との連携の4つを目標としている。参加発足に向けて実施した学協会の若手の会へのアンケートに対して、2013年3月18日時点で137件の回答が集まった。アンケートへの回答があった組織に対し、随時ネットワークへの参加方法についての案内を送っている。若手研究者ネットワークの構成員は、若手の会等の代表者とし、若手の会の設置を準備中の学協会については、担当の役員などがオブザーバとして加わることができる。3月18日時点での登録数はオブザーバも含め74団体である。主に、メーリングリストとFacebookグループを用いて、意見交換を行っている。

また、若手研究者ネットワークでは、毎年レポートを発行する予定で、参加している若手の会の活動の紹介やワークショップなどの若手研究者ネットワークの活動を掲載する。レポートは、若手アカデミー委員会のホームページで公開する予定である。

(一ノ瀬友博委員 (若手研究者ネットワーク担当))

#### ○学協会 若手の会代表者が集うワークショップを開催

2013年3月17日(日)には、第1回目のワークショップを開催した。工学院大学(東京都)と大阪大学(大阪府)の二つに会場を設定し、スカイプでつないで会議を行った。さらに、会場に参加できなかった若手の会代表者に様子を見ていただき議論に参加していただくため、Ustream中継を流した。

若手の特徴として、忙しく、また人数が少ない点が共通していた。これは日本特有の状況であることを鑑みた若手の会あるいはネットワークの運営が必要であると指摘があった。ポストク問題をはじめとする若手問題については、年代や状況によって階層性があるので、それを整理し提示する必要があると指摘された。

また、ネットワークの運営については、継続的に交流することで得られる成果を目指すことがよいとされ、たとえば共通のキーワードを設け、招待講演の形でシンポジウムを開催し、ネットワークの交流とアウトリーチを兼ねたイベントを行っていくとよいと提案された。

(横山広美委員 (若手研究者ネットワーク担当))

### (3) 海外派遣

#### ○グローバルヤングアカデミー総会

(平成24年5月20日~24日, 南アフリカ(プレトリア))

第2回若手科学者会議及び国際若手アカデミー総会(The Second Conference for Young Scientists & the Inaugural General Assembly of the Global Young Academy: GYA)へ、駒井委員長及び2012年の新GYA委員として狩野副委員長の代表派遣がなされた。また、若手アカデミーの設立が国際的潮流となる中、若手アカデミー間の交流も広がりつつある。昨年の2月にスウェーデン及びオランダ若手アカデ

ミーを狩野副委員長が意見交換で訪問したことが契機となり、6月7日の第5回拡大役員委員会において Helene Anderson-Svahn 博士（スウェーデン若手アカデミー代表）が講演を行い、委員との意見交換が行われた。（狩野光伸副委員長）

#### ○若手アカデミー国際シンポジウム

（2012年10月31日～11月1日、オランダ（アムステルダム））

各国の若手アカデミー代表が集う初の国際シンポジウム「各国若手アカデミーの将来方針策定」が開催され、狩野副委員長及び竹村委員が参加し日本の若手アカデミーの活動報告や他の若手アカデミーとの意見交換を行った。来年度も、スウェーデン・日本若手アカデミー合同会議が2013年6月12日から13日の日程で企画されており、分野を問わない若手研究者間の活発な国際交流を引き続き行っていく予定である。

（竹村仁美委員）

#### ○IAP 総会ワークショップ

（平成25年2月24日～26日、ブラジル（リオデジャネイロ））

IAP 総会ワークショップ「貧困根絶と持続可能な発展のための科学」が開催され、駒井委員長が参加した。IAPのCo-Chair、ブラジル科学技術会議会長からの開会のあいさつに続き、ブラジル科学技術大臣のキーノートスピーチが続いた。日を改めて、多くの時間は「アイデア・ラボ」に費やされた。世界経済フォーラムにおける「アイデア・ラボ」のフォーマットを利用し、Global Young Academy メンバーのイニシアティブにより以下のテーマについて様々な意見を引き出し、集約することで本ワークショップのアウトプットを見出すこととした。1) サイエンス・リテラシーの向上、2) 世界的な食の安全の向上、3) 世界的な健康の向上、4) 水と衛生環境の向上、5) 気候変動への対応、6) 持続可能なエネルギーの未来の以上6項目について世界各国の研究者が議論し、意見を取りまとめることに注力した。駒井は3の健康の向上セッションの中でメンタルヘルス向上のための微細動作解析と同データのビッグデータ化について話題提供を行った。いずれの議題に関しても様々な方面との対話と教育によって学术界は貧困の根絶と持続可能な社会を目指す必要があると議長により取りまとめられ、会は終了した。（駒井章治委員長）

#### （4）公開シンポジウム

○「『心の時代』と学術 —若手研究者とともに考える社会の不安と喜び—」の開催  
（日時：平成24年6月23日（土）13時～17時30分、於：日本学術会議講堂）

若手アカデミー委員会委員3名をパネリストとして「心」と現代をテーマとした学際的シンポジウムを開催した。高橋良和委員は「新しい土木はどのように心と対峙するか」、谷口尚子委員は「民主主義の『理想』と『現実』」、田中由浩委員は「ロボッ

トの役割とヒトとの調和」についてそれぞれ話題提供を行い、その後パネルディスカッションを行った。参加者は60名程度であったが、熱心な議論が展開され、今後の融合的な研究展開が期待されるものとなった。特に、「心」という一つのテーマについて異分野の若手研究者が自身の研究分野における現代的問題について掘り下げ、現代社会の内包する様々な問題を共有できたことは非常に貴重な機会となった。

(川畑秀明委員)

○『若手研究者問題』と『情報系』～日本学術会議若手アカデミー委員会企画パネル討論～の開催

(日時：平成25年3月7日(木)10時～12時、於：東北大学川内キャンパス)

いわゆる「若手研究者問題」の現状と将来への展望を得るため、情報処理学会第75回全国大会イベント企画として、「情報系」と他分野の双方から第一人者(近畿大学 榎木英介氏、グーグル株式会社 賀沢秀人氏、若手アカデミー委員会 駒井章治委員長、東京工業大学 松岡聡氏、日本アイ・ビー・エム株式会社 森本典繁氏、若手アカデミー委員会 横山広美委員)を招聘、事前アンケートを参考に、会場の若手研究者・企業関係者・学会役員らも交え、時間を超過して予想以上に活発な議論が行われた。

(住井英二郎委員)

○「若手研究者たちと考える、君達の、そして日本の未来」の開催

(平成24年3月16日(土)15時30分～17時、於：京都パルスプラザ)

平成24年3月16日(土)、京都パルスプラザにおいて開催された、日本学術会議外24団体主催「科学・技術フォーラム」において、若手アカデミー委員会としてシンポジウムを開催した。本企画は、次世代を担う科学・技術関係人材を育成するため、青少年の科学・技術への興味・関心を喚起し、科学・技術に親しみ学ぶことが出来る場を提供すること、また国民と科学・技術に関わる者が直接対話する双方向のコミュニケーションを実現し、国民の声を国の研究開発に反映すること等を目的とするもので、昨年引き続き2回目である。

様々な分野の若手科学者11名集まり、「2050年の科学・技術」をテーマに、高校生・大学生が叶えたい未来について、一緒に議論した。医療、情報、社会系などのキーワードが挙げられた中、最後に彼らが選んだキーワードは「交通」であった。ブレインストーミングの中で、今のネット社会では様々な情報が直ぐに手に入り、コミュニケーションも可能であるものの、それは交通の制約があるために出てきた代替技術であって、本音は自身で実体験したいことに気づき、これを解決する科学・技術として、交通を選んだのであった。

このような若手研究者との直接対話の「実体験」が、さらに若い世代の更なる科学

への興味を高めることにつながることを期待している。

(高橋良和幹事)

#### (5) スウェーデン若手アカデミーとの交流「Sweden-Japan NYA Meeting in Stockholm」

2013年6月12-13日、スウェーデン・ストックホルムにて、スウェーデン若手アカデミーとの交流をおこない、お互いのアカデミーの現状や課題を共有し、さらなる国際的な連携や展開を図る。また、スウェーデンと日本のあいだの共同研究や学術連携の契機として研究者同士の意見交換や交流をおこなう。日本学術振興会（JSPS）ストックホルム事務所の助成による企画である。日本側からは10名が参加予定である。日程は下記を予定している。

12日：Karolinska Institute, Royal School of Technology, Stockholm University の現場視察

13日：Joint Meeting between the Young Academies of Sweden and Japan（研究発表、グループ・ディスカッション、夕食会）

(西山雄二委員)

#### (6) 次期若手アカデミーの組織・運営の在り方についての審議

第21期の提言「若手アカデミー設置について」（平成23年9月28日）および本委員会で実施している活動状況を基に、第23期における若手アカデミーの設置を目指し、若手アカデミーの組織・運営の在り方について審議を行っている。日本学術会議における位置づけ、構成員、運営、本委員会での活動と設置以降の活動の持続可能性と発展性などについて審議しており、特に、位置づけについては、日本学術会議における「地区会議」を参考にする方針で検討が進められている。

#### (7) 委員会運営における積極的なネットワーク利用について

若手世代が抱える問題のひとつとして、子育て等の理由により、遠方より東京の会議に出席しにくいことが指摘されていた。この問題を解決する手段のひとつとして、委員会開催時に、スカイプによるビデオ参加を試行し、ビデオ会議特有の課題等を改善しながら、数回の試行を重ねてきた。この取り組みは、一つの委員会運営のあり方として注目され、関係事務局の見学もあった。この取り組みは、ビデオ会議でも実質的な委員会運営を可能とすることをしめした点において、現在の日本学術会議におけるビデオ会議による委員会開催への参考となったと考えている。

その他、役員による打合せや各委員による打合せも、スカイプを用いて度々実施するとともに、SNS利用の検討として、Facebookを使用し委員会専用の非公開ページを作成し、委員が議論をいつでも展開できるようにしている。また、独自のホームページを作成し、公開している。(http://www.youngacademy-japan.org)